

# 「ナチス絶滅収容所における人間性とリズムについての試論 ——ランズマン『ショア』の元SS伍長の話から出発して——」

山下 尚一

本論文の目的は、クロード・ランズマン監督の映画『ショア』を出発点として、第二次世界大戦期のナチス絶滅収容所について考えることを目的とする。とりわけ、虐殺がおこなわれるさい人間が人間性をなくしていくということ、そのとき収容所にはひとつの独特のリズムがはたらくということを考える。

フランスの映画監督・批評家であるクロード・ランズマン(1925-2018)は、1985年に映画『ショア』を発表した。『ショア』は第二次世界大戦においてナチスがおこなったユダヤ人虐殺についての映画である。その大きな特徴は、人々の証言を編集してつくり上げたことにある。証言するのは収容所から生還したユダヤ人だけではない。元ナチスの人々や、収容所の近くに住んでいたポーランド人たちも語っている。さまざまな人々の証言を収録することで、複数の見方を比較しながらユダヤ人虐殺についての考察が可能になる。そうして「あの体験はわれわれ自身の体験となる。フィクションでもドキュメンタリーでもないが、『ショア』は、場所と声と表情という驚くほど節約した手段をもって、過去の再創造をやったのけた。場所をして語らしめ、声を通じて場所をよみがえらせ、言葉を越える表情によっていわく言いがたいものを表現したことこそ、クロード・ランズマンの卓越した技術であった」<sup>1</sup>。

本論文ではナチス絶滅収容所について考察するにあたり、『ショア』第I部における元ナチスSS伍長のインタビューの場面を取り上げる<sup>2</sup>。彼は自分が勤務していた絶滅収容所について語る。彼の言葉や表情を分析することによって、収容所のなかで人々が虐殺のリズムに巻き込まれていき人間性を失ってしまうということがわかるだろう。

第一節では、SS伍長が収容所でどのような役割をしていたのかを確認し、第二節では、映画における

元SS伍長の話を見ながら、彼の特徴として思考が欠けているということを挙げる。第三節では、そのように思考や感覚といったものが停止するときに虐殺が起きるのではないかという説を取り上げ、第四節では、ナチスの絶滅収容所においては人間の人間性それ自体が停まってしまうことを示す。第五節では、アーレントの論をもとに、収容所というシステムが人間という存在を無用にすることを指摘する。第六節では、収容所のシステムをリズムという語によって考察することを提案し、第七節では、収容所ではすべてが予測されるようなリズムが支配し、それが人間の人間性を停止させるということを述べる。

## 1. SS伍長の役割

SSとはナチスの組織のひとつで、「親衛隊」と訳される。SSはもともとヒトラー個人を守る護衛隊としての役割をはたしていたが、だんだんユダヤ人虐殺の業務を担当するようになる。そして絶滅収容所を管理・運営し、ユダヤ人の大量殺害を実際に進めていく。その意味でSSは「ナチ期のテロと抑圧を体現する組織」だといえるし<sup>3</sup>、さらにSSの機能は「質的に新しい包括的な支配形態——暴力、官僚制、イデオロギー、そして強化された人種生物学を独特のかたちで組み合わせたもの——をつくり出そうとする試み」だったという<sup>4</sup>。

SS伍長の職階にある人は、収容所において具体的にどのような行動をおこなっていたのか。アウシュヴィッツ収容所からのユダヤ人生還者であるルドルフ・ヴルバの言葉を聞いてみよう。SS伍長は、ランプと呼ばれる荷降場で、移送されてきた大勢のユダヤ人を待つ。「列車が停止するが早いか、選り抜きの

“ギャング”たちが、ランプに進み出る。貨車 2 両か 3 両ごとに、1 両ごとのこともあったが、鍵を持って待機していた S S 伍長が扉を開ける。貨車には、錠がかかっていたからね。なかに乗っているのは、無論、あの人たちだ。明かり取りの小窓から、外をうかがっている様子が見えるが、ずいぶん何度も停車をしたあとなので、——10日も乗っている人もいたし、2 日の人もいたからね——今度の停車の意味を、はかりかねている。すると、扉が開き、最初にぶつけられた命令は、「アルレ・ヘラウス！」(全員、外へ)というのだ。しかも、その意味をわからせようとして、連中は、杖で、ひとり、2 人、3 人……と、片っぱしから、なぐりつける。ユダヤ人は、貨車の中に、缶詰のいわしのように詰め込まれていた。移送列車が、1 日に、4 本、5 本、6 本も、予定されている場合には、荷降ろし作業も、一段と急ピッチで、進めなければならなかった。杖や棍棒でど突き、口汚く罵ったものだ」<sup>5</sup>。

収容所に到着したユダヤ人が困惑しているのを見て、彼らを突然なぐりつける、どなりつける、そして速いテンポで急がせて、何も考えさせないままにガス室へと追い立てていく、それが S S 伍長の仕事だった。S S 伍長は現場に出てきて、ユダヤ人に直接的に迫害を加えた人たちだったということである。

そのような元ナチスの S S 伍長が映画に出演し、みずからの過去の出来事を語るというのは、きわめてめずらしい。なぜ彼が語ってくれるのかというと、自分が映画に出演しているとは考えていないからであり、それどころか、自分の顔、それ以前に自分の名前が公表されるとすら思っていないからである。ランズマンは隠し撮りをしている。映画のなかで、元 S S 伍長が自分の名前を出さないでほしいというのだが、ランズマンはそれに対して、「大丈夫、大丈夫、それは約束したとおりです」とうそをつく<sup>6</sup>。もちろん、そんなふうに相手をだまして撮影するのがよいのかといった問題はある。だがランズマンからすれば、ユダヤ人虐殺という重大な出来事を理解するにはそうした手段も必要なのだろう<sup>7</sup>。たしかにこの証言は貴重なものだ。なぜならこの隠し撮り

の場面によって、その話し方や表情を見て取ることができるし、ユダヤ人虐殺のプロセスについて加害者がどんなふうに考えているのか、あるいは考えていないのかについて論じることができるからである。

## 2. 思考が欠けていること

それでは、実際に映画の場面を見てみよう<sup>8</sup>。元 S S 伍長はフランツ・ズーホメルという名前である。ズーホメル家の前に一台の車が止まり、車に設置されたアンテナが動いている。車内の男性が機器を動かして、モニターの画面がうまく映るように調整している。隠し撮りのようである。モニターの画面は鮮明とはいえず、単色であり、顔のおおまかな表情はわかる。ときどき微調整しないと画面は映らない。その画面には、インタビューをする監督のランズマンと、インタビューを受けている元 S S 伍長のズーホメルがいる。ズーホメルは画面の映り具合が悪いためなのか、ぼんやりとした顔立ちのように感じられる。ドイツ語で話している。彼の話している様子を見ると、聞かれたことに対してたしかに答えてはいるのだが、彼が加害者としてどんな感情を抱いていたのかということがあまり伝わってこないように思われる。

ズーホメルは、ポーランドのトレ布林カ絶滅収容所に勤務していたという<sup>9</sup>。「[ズーホメル:] トレ布林カの第一印象は、私にも、一部の同僚にも、凄惨そのものだった。どんなふうだとか、何をするところだとか、いわれてきたわけではなかったからね、だいたい、あそこで、人を殺すなんて話は、聞いてなかったんだから。[ランズマン:] ぜんぜん知らなかったというわけですか。[ズーホメル:] そうですよ。[ランズマン:] でも、信じられませんか! [ズーホメル:] でも、本当なんだ。私は行きたくて行ったんじゃない。私の裁判でも、立証されたとおりで。こういわれたんだよ。「ズーホメル君、あそこには、洋服屋や靴屋が働く、大きな作業場がある、監督に行きたまえ」。[ランズマン:] ええ、ええ。[ズーホメル:] いいですか。[ランズ

マン：]でも、収容所であることは、知っていましたね？[ズーホメル：]うん。いわれたのは、こうだったんです。「総統は、〈再定住〉作戦を命令された。これは、総統命令だ」とね。[ランズマン：]ええ、ええ。[ズーホメル：]おわかりかね？[ランズマン：]〈再定住〉作戦……ね。[ズーホメル：]〈再定住〉作戦ですよ。“殺す”なんて一度もいわれたことがなかった。[ランズマン：]ええ、ええ、そのことはわかりました」<sup>10</sup>。

このようにズーホメルは、「自分は人を殺すなんて話は聞いていなかった、自分はまったく知らなかった」というふうに強調する。自分が知らされたのは「再定住」のための作戦だということだけであり、まさか「再定住」という言葉が、ユダヤ人の殺害を意味するとは思ってもよらなかったという。

ナチスはユダヤ人虐殺について話すとき、あるいは文書にするとき、直接的な言葉をつかわない。『ショア』のテキストの訳注にしたがえば、「ナチは〈再定住〉計画の名のもとに、ユダヤ人を強制移送した。しかし移送先でおこなわれたのは大量虐殺であった。〈再定住〉とはユダヤ人絶滅政策をカムフラージュするための“公式用語”であった」<sup>11</sup>。だからズーホメルも、彼自身がいうように「再定住だ」とだけいわれたのかもしれず、それが虐殺を意味するとは知らなかったのかかもしれない。だが彼は、新しい勤務先が収容所であることは知っていたと話している。結局のところ映画のなかの情報だけでは、ズーホメルがどこまで知っていたのかよくわからない。とはいえ当時のドイツの状況からすれば、収容所ではどうやら残酷なことが起こっているということは予想されるはずである。まわりではユダヤ人がどんどん連れていかれて、まったく帰ってこない<sup>12</sup>。そういう状況であれば、「ユダヤ人を殺害する」と直接いわれていないけれども、収容所では普通ではないことが起こっているのではないか、そんなふうに考えることもできる。もし「再定住の作戦なのだ、靴や衣服の作業所があるのだ」と聞いてそれをうのみにするなら、あまりにも単純であり、それは何も考えていないということである。つまり思考していないということである。ズーホメルには考えるとい

うこと、思考するということが欠けている。それにより、彼の話し方や表情はどこかぼんやりとしたものに感じられるのかもしれない<sup>13</sup>。

他方でズーホメルは、絶滅収容所にかんするこまかな数字を記憶している。「毎日、ユダヤ人 100 人を選び出しては、死体を穴まで引きずって行かせた。晩になると、ウクライナ兵が、そのユダヤ人をガス室にぶち込むか、撃ち殺した。毎日、毎日のことだった。8月の猛暑のなかだ。地面は、まるで波のように、ゆらめいていた、[死体から出た]ガスのためにね。[略] 思い浮かべてもみたまえ。穴は、6、7 メートルぐらいの深さで、どれにも、死体が縁までぎっしり詰め込んである」<sup>14</sup>。「片づけも間に合わないほど、大勢の人が倒れ、死体の山は、ガス室の前に、何日も、何日も、うず高く積まれたままだった。その死体の下には、汚水溜りができていた。この深さ 10 センチほどの汚水溜りは、血と、うじ虫と、糞が混じり合って、ドロドロになっていた」<sup>15</sup>。このように証言のなかの数字を見ると、ズーホメルが収容所の様子をしっかりと覚えていることがわかる。記憶はするけれども、思考することはしない。何が起きたのか、どんな場面だったのかということを今も覚えているけれども、それについてどんなふうに考えて、どのように取り組んだのかについては語らない。

ズーホメルの別の証言を見ても、彼には思考することが欠けているのが読み取れる。「[ズーホメル：]ユダヤ人だって、そこではたらく[放置されていた大量の死体を片づける]ぐらいなら銃殺されるほうを、望んだぐらいだ。[ランズマン：]むしろ銃殺を望んだ、ですって？[ズーホメル：]身の毛もよだつことだった。一部始終を目にしたうえで、また同胞を埋めるというのは……。死体の肉片が、に残るのだからね。そこで、ヴィルト[ナチス絶滅作戦の査察官]は、みずから、乗り込んできた。数人のドイツ兵を連れてだ……。部下に、革を切って、長いベルトをつくらせ、それを死体の胴に回して、引っ張るようにした。[ランズマン：]だれがしたのですか？[ズーホメル：]ドイツ兵だよ。[ランズマン：]ヴィルト？[ズーホメル：]ドイツ兵と、ユダヤ人だ。[ランズマン：]ドイツ兵とユダヤ人が、

ですって！ユダヤ人もしたんですね？〔ズーホメル：〕ユダヤ人もだ。〔ランズマン：〕そうですか。しかし、ドイツ兵は何をしたんですか？〔ズーホメル：〕ユダヤ人を強制したり……〔ランズマン：〕なぐったんですね？〔ズーホメル：〕……みずからも、死体の片づけ作業に加わった。〔ランズマン：〕どういうドイツ兵ですか？〔ズーホメル：〕監視兵の中で、第二収容所へ派遣された連中だ。〔ランズマン：〕ドイツ兵みずから、したのですか？〔ズーホメル：〕手を貸さざるをえなかったのだ。〔ランズマン：〕彼らは、命令していたんじゃないですか！〔ズーホメル：〕命令もした。命令されてもいたし……、また、命令してもいた。〔ランズマン：〕はたらいたのは、ユダヤ人だと思いますが。〔ズーホメル：〕こういう状況では、ドイツ兵も、手を汚さずにはすまなかったんだ」<sup>16</sup>。

ズーホメルは、放置されていた死体を片づけるという状況をよく覚えているのだが、それについて思考することはしない。この証言においても、ユダヤ人たち、ドイツ兵たち、さらにナチスの査察官がどのように行動したのかについては語られるけれども、ズーホメル自身はどんなふうに行動したのか、仕方なく自分も死体を片づけたのか、あるいはユダヤ人をなぐりつけていたのか、それは語られない。そして、このきわめて異常な状況のなかで彼自身はどのように考えたのか、それも語られることはない。もちろんランズマンの編集によって、ズーホメルの話が切り取られた部分も多いだろう。だが少なくとも映画の本編のなかでは、自分の考えたことをズーホメルが語るといった部分はなく、その意味でこの人物には思考が欠けているように思われる<sup>17</sup>。

### 3. 何かが停まること

もちろん戦争中にユダヤ人を虐殺していたのは、ナチスの兵士だけではなくた。たとえば一般のポーランド住民たちがユダヤ人を殺したという事件があった。その事件は、いなかに住む村人たちが、同じ村に住んでいるユダヤ人たちを追い立てて納屋に閉じ込め、火をつけて虐殺した、そのような出来

事だったという。

その事件についてのひとつの対談を見てみよう。『森〔達也〕：NHKのドキュメンタリー『沈黙の村——ユダヤ人虐殺・60年目の真相』では、実際に虐殺に加担した〔ポーランド人〕男性が登場します。村でも評判の愛妻家である彼は、とてもひょうひょうとしていました。隠しているわけじゃない。やっぱり実感がありません。映画やテレビなどではよく、罪の意識を抱えながら生きるという描写があるけれど、実際のところはだれもがぼんやりとしている。もちろん、できれば思い出したくないという気持ちもあるでしょうが、『なぜこんな事件が起きたのか〕わからない』『と答えたのは〕は言い訳じゃなくて本音なんだろうと思います。加害した彼らでさえも。……加害した彼らだからこそ、と言ったほうがいいかな。／姜〔尚中〕：かもしれないね。／森：徹底してリアリティがない。何かが停まってしまっているときに起きていることだから、後から振り返っても自分を解析できない」<sup>18</sup>。虐殺しておきながらも、そのような重い事実があったようにはどうも感じられない、人を殺してしまったという実感が伝わってこない。それは、「何かが停まってしまっている」かのようなだといわれている。

『ショア』に登場するズーホメルも、大量虐殺の現場に立ち会っていたにもかかわらず、どこかひょうひょうとしている。たしかにトレ布林カは異常な状況であった。しかしそれについてズーホメルはどのように考えたのか、どのように行動したのかがまったくわからない。それはつまり、ズーホメルにおいて「何かが停まってしまっている」ということではないだろうか。次のやりとりを見てみよう。〔ズーホメル：〕〔無数の死体が詰め込まれた穴の〕悪臭ときたら、地獄のようだった。〔ランズマン：〕地獄のよう？〔ズーホメル：〕そうだ、絶えず、腐敗ガスがもれ出していたからね。たまらない悪臭が、数キロも先まで、臭っていた……。〔ランズマン：〕数キロも？〔ズーホメル：〕数キロ先でもだ。〔ランズマン：〕臭いは、どこでも感じられましたか？収容所にかぎらず？〔ズーホメル：〕どこでもさ。風向き次第に、臭気は流れて行くんだから。おわか



りかね？」<sup>19</sup>。

ズーホメルは、トレブリンカ収容所は地獄であったと話しているが、結局その地獄に勤務しつづけている。彼はたまらない悪臭のなかで食べたり、飲んだり、寝たりできる。それは簡単にいうと「状況に慣れる」ということだろうが、言葉を変えれば、自分の感覚をなくしている、つまり「感覚が停まっている」ということである。だが停止しているのは感覚だけではない。ズーホメルは、大量殺害がおこなわれているまさにその場所で生活を送ることができる。それはすなわち、まわりで起きている事態について考えないということ、思考しないということである。結局のところズーホメルにおいては「思考が停まっている」。このようにズーホメルは、ひどい臭気がたちこめていたなかでどんなふうに考えて暮らしていたのかについてはまったく述べていない。

#### 4. 人間性が停まること

虐殺が進められるとき、何かが停まってしまう。停止するのは自分の感覚であり、自分の思考である。だが別の見方をすれば、自分の「人間性が停まってしまう」ときに虐殺がおこなわれるのではないか。つまり、「自分はまさしく人間である、はっきりと人間である」、そのような自覚が停まってしまうときに、大量殺害がおこなわれるのではないだろうか。加害者は殺害をおこなっているとき、自分が何をしているのか、自分が何ものであるのか、よくわかっていない。自分を取り巻く狂気的な状況に押し流されることで、あるいはその状況にみずから飛び込んでいくことで、「自分は自分であり、ひとりの人間である」ということが停止してしまう。だからこそきわめて残虐な行為ができるし、そのことをあとから思い出しなくても、自分がそのときどのように考えていたのかわからない。

次のようにいうこともできるだろう。「森：戦場や虐殺の場では何らかの回路が駆動するのではなく停まってしまうからこそ、その感覚が後から再現できなくなるということ。この回路は一人称の主語を保つことでもある。その瞬間に回路が停まり、つま

り主語を喪失してしまっているからこそ、リアルな感覚が欠落して、今の自分の生理からは隔絶されてしまう」<sup>20</sup>。そのとき、一人称の主語をもつということ、つまり「私は私である」ということが停止してしまう。そうしてその破壊的な行為が終わったあと、自分でも自分のことを説明できない。

そのように、収容所のなかではだれであっても人間であるということができなくなる。つまり加害者も被害者も、まったく同様に人間性をなくしてしまう。アウシュヴィッツ収容所の生還者であるレーヴィは、『これが人間か』という著書で以下のように述べている。「[アウシュヴィッツの体験を描いた]この本に登場する人物たちは人間ではない（注 91）[ママ]。彼らの人間性は、他人から受け、被った害の下に埋もれている。さもなくば彼ら自身が埋めてしまったのだ。意地悪く愚劣なSSから、カポー〔監視役の囚人〕、政治犯、刑事犯、大名士、小名士をへて、普通の奴隷の囚人に至るまで、ドイツ人がつくり出した狂気の位階に属するものはすべて、逆説的だが、同じ内面破壊を受けているという点で一致していた」<sup>21</sup>。この引用のなかの注 91 はレーヴィ自身がつけたものであり、以下のように記されている。「この文章に、この本とその題名がもつ深い意味が込められている。ラーゲル〔収容所〕は否定の世界で、人間性を、つまり人間の尊厳を抹殺する。それは犠牲者だけでなく、抑圧者の側でも同じだ」<sup>22</sup>。

収容所という場合は、加害者の人間性も被害者の人間性も同じように抹殺する。いいかえると収容所とは、それにかかわるすべての人間から人間性を取り去ってしまう場所であって、全面的に人間性が停止してしまう場所である<sup>23</sup>。

ズーホメルをはじめとして、『ショア』に登場する元ナチスの人物たちを見ると、加害者のほうが人間性をより失っているように思われる。収容所から生還したユダヤ人は、異常な状況について自分が感じたことを苦しみながら語り、そのとき考えたことを思い出しながら語っている。そのために彼らの話し方は、身にせまってくるような、リアリティのあるものとなる。それに対して元ナチスの人たちは、自分が殺害についてどのように思考したのかという

ことについて語らない。彼らには考える力がなくなっている。だからこそズーホメルのように、戦争が終わったあとになって、「そのとき自分は殺すとはいわれていなかった、自分は知らなかった」と強調する。その言葉が意味するのは、「そのとき自分は自分ではなかった、思考ができない状態だった」ということである。このように、加害者と被害者の双方が人間性をなくすとはいえ、人間性を完全に失っているのは加害者のほうである<sup>24</sup>。

## 5. 人間を無用にするシステム

虐殺は何かが停まったときに起きてしまうという考えを受けて、本論文では、感覚、そして思考が停まるのではないか、さらに、自分がひとりの人間であるということ、つまり人間性そのものが停まるのではないかというふうに考察してきた。

それでは人間性とはどのようなことか。ここではアーレントの考えを参考にしてみよう。人間は思いもよらないことをしたり、予測できないことをしたりする。すなわち「自発性——つまり、環境や事件に対する反応では説明されえないある新しいものをみずから進んで創始する能力」をそなえている<sup>25</sup>。人間はみずから考えたり行動したりするのであって、まわりの環境や状況に応じて機能するだけではない。そうではなくて、みずから進んで新しいことをはじめる、それが人間の能力である。つまり人間とは、状況を受け入れたり、状況に順応したりするだけではなく、その状況についてみずから考え、その状況をめぐる新たな取り組みを自分で開発することができる存在である。

だが絶滅収容所においては、人間は次から次へと殺されていく。元 SS 伍長のズーホメルによれば、トレ布林カ絶滅収容所に到着する列車には「どれも、3000、4000、5000 というユダヤ人を載せていた」し<sup>26</sup>、新型のガス室の処理能力は、「2 時間で、3000 人は片づけられた」という<sup>27</sup>。つまり、人間はちょうど到着した数だけ殺されなければならない、例外はない。被害者はすぐに殺される。もし運よくユダヤ人特別労働班として生き延びることができた

としても、次の列車の人々を効率よく殺すために、死体の片づけや持ち物・衣服の整理をさせられる。加害者にしても、それだけ多くの人間を殺し、その死体や持ち物・衣服を処理するために指揮しなければならない。収容所ではそのような殺人のシステムだけが動いていて、そのシステムに合わないようなものは必要がない。つまり、新しいことをはじめるような自発性は必要がない。

アーレントはこうしたシステムのことを、全体主義の体制だと述べている。「人間がさまざまな反応によってさまざまな機能を〔略〕果たすだけのものであるならばともかく、それ以上のものだとなれば、そんな人間は全体主義体制にとってはまったく無用のものだ。全体主義体制にとって問題であるのは、人々を支配するデスポティックな体制を打ち立てることではなく、人間をまったく無用にするようなシステムをつくることなのだ。完全にコントロールされる反応装置、一切の自発性を奪われた操り人形を相手にしてのみ、全体的権力は行使されえ、確立される」<sup>28</sup>。

収容所ではまさしくそのようなシステムが確立している。被害者であれ加害者であれ、すべての人たちは効率よく人を殺していくことしかできない。その状況についてみずから考えたり、自分なりの新しい取り組みをはじめたりするということはまったくなくなり、収容所で起こるあらゆることが予測できるようになる。あるゲッソーから 3000 人のユダヤ人が移送されると連絡が入れば、その数のユダヤ人が到着し、その数のユダヤ人を殺害し、その数の死体を片づける。すべてのことは決定されてしまっており、そこに自発性を介入させてはならない<sup>29</sup>。たしかに自発的に思考したり行動したりしては、次から次へとやってくる何千もの人々を殺害しつづけることはできない。もちろんこのことは、被害者だけではなく加害者にもあてはまる。つまり、ユダヤ人たちに自発性がないのと同じように、SS にも自発性がない。これは、加害者に責任があるかないかという問題ではなく、収容所と人間性一般についての問題である。すなわち加害者は、絶滅収容所にいるときに、収容所のシステムに完全に取り込まれ

て支配されてしまったということであり、もはや人間ではなくなっていたということである。だから加害者は、戦争が終わって人間に戻ると、戦争のときのこと、すなわち自分が人間ではなかったときのことをうまく思い出せず、説明できない。このように収容所では、専制的・独裁的な仕組みがあるというよりも、人間であることを停止させるシステム、人間であることが無用となるようなシステムがはたらいっている<sup>30</sup>。

## 6. 収容所のリズム

これまで見てきたように、収容所という場所ではシステムがすべてを支配している。一般に私たちが収容所について思い浮かべるのは、ナチスのSSがユダヤ人を支配しているという図式である。だがそうではなくて、収容所のシステムがユダヤ人を支配しており、それと同様に、システムがSSを支配している。そこにいるすべての人間がシステムに巻き込まれ、からめとられていて、自発的に考えることができなくなっている。アーレントがいうように、「そのあとに残るのは、生身の人間の顔を与えられているがゆえにかえって無気味な、例外なしに死にいたるまで唯々諸々と反応を——反応のみを——つづけるパブロフの犬と同様にふるまうあの操り人形なのだ。これこそこのシステムの最大の勝利である」<sup>31</sup>。

この収容所のシステムは、リズムという言葉をつかって考えることができる。すなわち「ラーゲルという巨大な機械のリズム」があるのであって<sup>32</sup>、それがすべての人々を管理し支配している。被害者であれ加害者であれ、人間はそのリズムに引きずりまわされ、かろうじてついていくことができるだけである。その巨大で強力なリズムに巻き込まれてしまうと、それについて立ち止まって思考したり、何らかの活動を自分ではじめたりすることはできない。元SS伍長のズーホメルによれば、当時のトレブリンカ収容所は「フル回転」であり<sup>33</sup>、ガス室は「昼も、夜も、稼働していた」という<sup>34</sup>。さらに上の引用でも見たように、ドイツ兵がみずから「死体の片づけ

作業に加わった」し、その「手を汚さずにはすまなかった」という<sup>35</sup>。それはきわめて速いだけではなく、加害者たるドイツ兵をも力強く巻き込んでしまうようなリズムなのであり、もちろんズーホメルもこうした収容所のリズムにからめとられていた。だからこそ彼はひどい悪臭のなかでも飲んだり食べたりすることができたのだし、虐殺という出来事について思考せずに生きることができた。ズーホメルはこの殺人のリズムに回収されることで人間であることをやめ、そのリズムを再び駆動させるためにのみはたらいだ。このリズムは、被害者も加害者も同じように飲み込みながら、人間であることを無用にするべく動きつづける。

『ショア』においてリズムという語が出てくる箇所を見てみよう。それは、リトアニアのヴィリニュス収容所からのユダヤ人生還者であるモトケ・ザイドルとイツハク・ドゥギンが話している部分である。ザイドルとドゥギンはヘブライ語で語っており、それを通訳者がフランス語にするときにはリズムという言葉があらわれる<sup>36</sup>。「[ザイドル:] [穴の] 底へと掘っていくにつれ、死体は平べったくなり、しまいには、スライスとでもいったらいいほどの、ぺちゃんこでした。死体をつかもうにも、見るかげもなく、ぼろぼろと、崩れてしまうのです。手でつかむのは、不可能でした。穴の掘り返し作業を、これからさせられるというときのことです。道具の使用を禁止されました。こう言われたんです、「慣れなくちゃだめだ。素手で、仕事をしろ!」とね。[ランズマン:] 素手だって! [ザイドル:] そうです。はじめのうちは、穴を掘り起こすたび、こらえきれず、だれもが泣き崩れてしまったものです。けれど、そうすると、ドイツ兵が近づいてきて、死ぬほど、なぐりつける。2日間というもの、気も狂わんばかりのリズムで (à un rythme dément)、はたらかされました。なぐられどおしで、しかも、道具はつかえません」<sup>37</sup>。

ここでも収容所の独特のリズムが見えてくる。ザイドルのヘブライ語の表現が不明ではあるものの、通訳者の使用した *dément* というフランス語は、「痴呆の」「心神喪失の」「ばかげた」「とてつもない」という意味をもつので、ユダヤ人たちは「狂気じみ

たリズムで」「心神喪失させるようなリズムで」はたらかされたということになる。それはおそろしいほどの速さをもったリズム、悲しさと苦しさから嗚咽するようなリズムである。さらに、ぼろぼろの死体を素手でつかみ取るように強制し、はげしい暴力を理不尽に与えつづけるようなリズムである。きわめて強力で高速のリズムが作動しており、それが避けがたくすべての人を支配している。そのリズムにかかわる人は、もはや人間性を維持できない。

## 7. リズムの予測可能性と予測不可能性

こうした収容所のリズムの特徴は、完璧な予測可能性ということにある。そこでは予測できない事態は起こらないし、あるいはむしろ起こってはならない。つまり、到着したユダヤ人は短い時間のうちにすべて殺害され、その殺害の痕跡は何もかも消去されるのであって、それ以外のことは起こらない。このリズムは絶対に決まった道のりをたどる。

それはまるで機械的なシステムが動いているようであり、だからこそゾーホメルはトレ布林カ絶滅収容所について以下のように述べるのだろう。「トレ布林カとは、死のベルトコンベアーだった。なるほど原始的ではあったが、うまく機能していた」<sup>38</sup>。すなわち一方ではベルトコンベアーなのだから、一度そのルートに載せられてしまったら、もう終わりまで逃げることはできない。つまりそれは人間を強制的に巻き込んでいく運動である。他方では原始的なのだから、管理者はその運動が停まることなく進むように、そして問題が起きないようにいつも監督しなければならない。つまり人間自身もその運動をつくり上げていく。このように人間は、そのリズムに引き込まれるとともに、そのリズムを再び作り出すのであり、まさにこのプロセスのなかで人間は人間であることをやめていく。

そうはいうものの、視点を変えて考えてみると、リズムというのは予測不可能なものを含んでいる。とりわけ音楽美学の理論を踏まえるならば、拍子とは同じものが反復することであるが、リズムとは、似ているけれども異なるものが到来するということ

である<sup>39</sup>。たとえばある音楽が4分の3拍子というふうに設定されれば、曲の終わりにいたるまでその拍子の形式が音の運動を支配する。途中で一時的に変化するかもしれないが、それは基本的には例外の行為とされる。拍子という見地からすれば、重要なのは決まった規則を繰り返す、厳格な図式をあてはめることである。それに対してリズムは、拍子と結びつきながらも、拍子の形式によっては予測できない何ものかを生み出す。それゆえ「拍子とは規則、メカニズムであり、機械や振り子時計の規則的な音である。リズムとは空想的なもの、予測できないものであり、しなやかに波打つということである」<sup>40</sup>。たしかに私たちは音楽を聞くとき、メトロノームのような機械的な繰り返しとは異なった運動を好む。そしてそこに演奏者の自発性や創意を見て取り、ポジティブにとらえる。

このように考えると、リズムの二つの矛盾した傾向が見出される。これまで見てきた絶滅収容所についての考察からすると、リズムは完全に予測可能であるが、しかしながら音楽芸術の見方からすれば、リズムは予測不可能なものを含んでいる。リズムは予測できるものでもあり、予測できないものでもある。厳格な図式ともいえるし、それと同時に、その図式にはとらわれない自発性ともいえる。この矛盾する関係は、弁証法的といってもよいかもしれない。「リズムは内的な矛盾を抱えている。なぜならリズムは自由と形式の弁証法だからであり、つまりは、弁証法が自分のために生み出した枠組みを、そこに自分が閉じ込められることがないようにと、みずから破壊しようとする自発性だからである」<sup>41</sup>。もちろん音楽にかんして、自由なリズムだけあればよいというわけではない。たしかに私たちはメトロノームとはちがった仕方での音楽の演奏を求めるが、だからといって設定された拍子をまったく無視するのではなく、やはり拍子の枠組みにもとづきつつもそれにとらわれず、拍子をみずから破壊していくような運動を望んでいる。それはしなやかで生き生きとしたリズム、予測不可能で自発的なリズムである。これに対して収容所のリズムは、すべての人間をきわめて強い力で次々に巻き込み、とてつもない速さ



でからめとってしまい、ユダヤ人たちを殺しつづけるという厳格な図式をあてはめる。あらゆる事態は予測できるものとなり、そこから逃れることはできない。これは究極にネガティブな形態としてのリズムといえよう。

しかしよく考えてみると、収容所においても予測不可能なリズムが作動しているかもしれない。ユダヤ人が収容所に到着してその狂気的な状況を見たとき、「これはおかしい。人間性を取り戻し、反抗しなければならぬ」という気もちになった人もいるだろう。だが抵抗などできない。ユダヤ人はすべて殺されてしまうからである。何とか特別労働班員として選ばれて生き延びることができたとしても、巨大で迅速な大量殺害のリズムにからめとられるしかない。だが収容所に到着したときに感じた最初の抵抗がなくなるわけではない。それは潜伏し、うごめきつづけ、やがてかたちをとる。その抵抗は、収容所のシステムにとっては予測不可能な仕方で行ってくる。ユダヤ人特別労働班員のあいだで秘密の連絡が交わされ、準備がなされ、突如暴動が起こる。絶滅収容所に小さな反乱が起こる。一見するとユダヤ人特別労働班は収容所のシステムに完璧に服従し、あたかも予測可能なリズムが支配していたかのようだが、実は見えないところで予測不可能なリズムが作動しつづけており、一挙に湧き上がってきたということである。それはあたかも、フロイトが抑圧されたものの回帰について語っていたように、幼いころ衝撃的な体験をした場合、そのときに傷を受けながらも理解できずにそのことを抑圧し、とはいえその傷がなくなってしまうわけではなく、長いあいだ潜伏して、大きな「時間的な隔たり」をもってあらわれてくるのと同じようである<sup>42</sup>。

実際、ズーホメル勤務していたトレ布林カ絶滅収容所においても反乱が起こり、収容所にとって予測不可能なリズムが湧出する。あるユダヤ人生還者は、まさに反乱の日にはズーホメルが収容所のなかを自転車で走っていたことを覚えている<sup>43</sup>。だがズーホメルはそのことについて映画のなかでは語っていない。もしかすると実際には語ったけれども、監督のランズマンが削除したのかもしれない。しかしな

が私たちの視点からすれば、以下のように考えることもできる。すなわちナチスのSSであったズーホメルは、収容所の予測不可能なリズムにすっかり身をゆだねてしまい、それがいわば当然であるかのように感じていたために、それを突然打ち破った抵抗のリズム、予測不可能なリズムについてはあまり思考したくないのかもしれない。いやむしろ、思考しようとしても、うまく思考できないのかもしれない。いずれにしてもこの場合リズムは、ポジティブな仕方では動きつづけている<sup>44</sup>。

## 8. 結論

以上私たちは、ランズマンの映画『ショア』におけるナチスの元SS隊員の証言から出発して、絶滅収容所における人間性とリズムについて考えてきた。彼の言葉や表情や話し方からすると、収容所の状況を記憶しているようだが、しかし思考してはいないようである。それはつまり、思考が停まっている、人間性が停まっているということであり、そのようなときにこそ虐殺の行為は進められていく。人間とは思ったりみずから何かを創始したりする存在であるが、絶滅収容所のように人間が次から次へと殺されていくようなところでは、人間を無用とするシステムが動き出す。それはきわめて速く巨大なリズムであり、収容所にかかわる人々はすべてそのリズムに取り込まれ、人間性を喪失していく。私たちはそこに、到着したものがみな殺されるという完全に予測可能なリズム、究極的にネガティブな意味でのリズムを見る。だがそれと同時に、そうしたリズムよりも深いところに、収容所のシステムに抵抗するような予測不可能なリズム、ポジティブにはたらくリズムを垣間見ることでもある。

本論文では絶滅収容所におけるリズムについて考えてきたけれども、さらに大きな観点から、ナチスのユダヤ人絶滅のプロセス全体をリズムとして考察することはできるだろうか。それにあたっては、フーコーの統治性の問題を参照すべきかもしれない。「統治＝政府の目的とは何でありうるのか。統治すること自体でないのはたしかであって、諸々の人口集団

の境遇を改善し、その豊かさ、寿命、健康を増大させることです。〔略〕統治＝政府は直接的にはキャンペーンをつかい、あるいは間接的には、たとえば人々がそれと気づかないうちに出生率を刺激することを可能にする技術によって、また、しかじかの地域において人口の流れをしかじかの活動へと導きながら、人口に対してはたらきかけるのです。人口はしたがって、主権者の勢力として、というより、統治＝政府の目的にして道具としてあらわれることになるでしょう。人口は、必要や希求の主体としてあらわれると同時に、また統治＝政府の手のうちにある客体としてあらわれる。人口は、統治＝政府を前にして自分たちが望んでいることについて意識しているが、同時に、人からするようにさせられていることについては無意識なのです」<sup>45</sup>。

この観点からすると、ユダヤ人絶滅の運動とは、アーリア人と定義される人たちの境遇をよくし、彼らの人口を増やしていくためのはたらきかけである。だがそれは、ユダヤ人と定義される人たちの抹殺しながらも全体の人口を拡大していこうとする、いやむしろ、ユダヤ人を抹殺することと全体の人口を増やすことを両立させようとする、そうした特殊な統治の仕方である。

ユダヤ人を絶滅させるための具体的な統治の技術としては、以下のこまかいプロセスがある。すなわち、ユダヤ人とはだれかという定義、ユダヤ人被雇用者の解雇とユダヤ人企業の接收、強制収容、ユダヤ人労働力の搾取と飢餓化の措置、そして抹殺、さらに個人所有物の押収、こういった諸々の固有の段階があって、どんな場合でもナチスはこれらの諸段階のなかにユダヤ人たちを押し込まなければならなかった<sup>46</sup>。ユダヤ人とされる人口とアーリア人とされる人口をめぐって、そうした独特の統治の技術が求められたわけである。これらの「統治の戦術こそが、個々の瞬間に、国家の管轄であるべきもの、国家の管轄であるべきでないもの、公的なもの、私的なもの、国家的なもの、国家的でないものを定義することを可能にする」であろうし<sup>47</sup>、そこにこそ第三帝国の固有のリズムが見えてくるかもしれない。この絶滅の歴史的運動のリズムを提示すること、そ

れはもちろん簡単ではないがきわめて重要な課題となるだろう。

## 注

<sup>1</sup> Simone de Beauvoir, « La mémoire de l'horreur », in Claude Lanzmann, *Shoah* (1985), Gallimard, 2018, p. 9. 邦訳、シモーヌ・ド・ボーヴォアール「恐怖の記憶」、クロード・ランズマン『ショア』所収、高橋武智訳、作品社、1995年、15頁。

<sup>2</sup> この元SS伍長は第II部冒頭でも登場しており、マルティはその場面における彼の表情の変化について分析する。Eric Marty, *Sur Shoah de Claude Lanzmann*, Manucius, 2016, pp. 13-17.

<sup>3</sup> 邦訳、ウォルター・ラカー編『ホロコースト大事典』(2001)、井上茂子ほか訳、柏書房、2003年、260頁。

<sup>4</sup> 邦訳、前掲、263-264頁。

<sup>5</sup> Lanzmann, *Shoah*, op. cit., pp. 68-69. 邦訳、ランズマン『ショア』前掲、107-108頁。ヴルバによると、興味深いことに、SSの出迎える様子が残忍ではないときもあったという。天気の良いときなどには彼らの態度はがらっと変わり、「奥さん、おはよう！どうぞ下車してくださいな」というように、上機嫌に、ユーモアをふりまくこともあったという。*Ibid.*, p. 69. 邦訳、前掲、109頁。この二面性はどこか無気味なものを感じさせる。ちなみにマルティは、『ショア』第II部において元SS伍長が愚かな顔と暴力的で冷酷な顔という二つの表情をしていることに注目し、そこにおいてこそ「大量虐殺の歴史的可能性を認めるような人間的現実」があらわになっているという。Marty, *op. cit.*, p. 17.

<sup>6</sup> Lanzmann, *op. cit.*, p. 84. 邦訳、ランズマン、前掲、134頁。

<sup>7</sup> ある論者がいうには、「『ショア』をつくるという、巨大な悪との戦いに比べれば小さな悪は許されるというか、そんな発想があるとは思えません」。鶴飼哲、高橋哲哉、岩崎稔「徹底討議／『ショア』の衝撃」、鶴飼哲、高橋哲哉編『『ショア』の衝撃』未来社、1995年、85頁。このランズマンの姿勢の意味については、以下を参照。邦訳、ドミニク・ラカプラ「ランズマンの『ショア』」(1997)、高

橋明史訳、『現代思想』1997年9月号、252頁。  
また元SS伍長へのインタビュー申し込みの経緯については、以下を参照。Claude Lanzmann, *Le lièvre de Patagonie* (2009), Gallimard, 2018, pp. 640-645. 邦訳クロード・ランズマン『パタゴニアの野兎(下)』中原毅志訳、人文書院、2016年、208-212頁。

<sup>8</sup> 本論文で取り上げるズーホメル証言は、DVDではおおよそ以下の部分である。クロード・ランズマン監督『ショア』(1985)、ポニーキャニオン、2015年、第1期、パート1、ch. 55。

<sup>9</sup> トレ布林カ絶滅収容所は、ポーランド、ギリシア、ユーゴスラヴィアからの約87万人のユダヤ人、そして少なくとも2000人のジプシー(シンティ、ロマ)がガス殺されたという。死体は当初穴に埋められたが、のちに虐殺の痕跡を消すためにユダヤ人特別労働班の手によって掘り返され、焼却された。邦訳、ウォルター・ラカー編、前掲、374-375頁。ユダヤ人特別労働班(ゾンダーコマンド)とは、殺害プロセスにかかわる労働のために、移送されたユダヤ人のなかから選ばれた人たちであり、収容所到着のさいに生きているユダヤ人に対応し、彼らの所持品処理をおこなうだけでなく、殺害されたユダヤ人の死体処理をおこなった。彼らは1か月ないし2か月間このような仕事をしたのちに、結局は殺害された。邦訳、前掲、320頁。

<sup>10</sup> Lanzmann, *op. cit.*, pp. 83-84. 邦訳、ランズマン、前掲、132-134頁。

<sup>11</sup> 邦訳ランズマン、前掲、63頁。「ナチのいう「東への再定住」は、帰り道のない死出の旅だった」。邦訳、マイケル・ベーレンバウム『ホロコースト全史』(1993)、芝健介監修、創元社、1996年、258頁。

<sup>12</sup> あるユダヤ人によると、戦後ドイツ人たちはユダヤ人虐殺について「自分は知らなかった」と弁解するという。「「そういえば、たしかに、ここにはユダヤ人が住んでいた。けれど、ある日突然、いなくなってしまった。何も知らなかった……」ですって! あの人たちの目に入らなかったはずがないでしょう! 一回だけの話じゃありませんよ! ほとんど2年近くも、繰り返された作戦じゃないですか! ほとんど2週間おきに、人々は、無理やり、家から狩り立てら

れていったんですよ。その間、あの人たちは、どうして、目をそらしていられたんでしょう? 見えないふりをしていられたんでしょうか?」。Lanzmann, *op. cit.*, p. 79. 邦訳、ランズマン、前掲、125-126頁。

<sup>13</sup> 「自分は知らなかった」と話すズーホメルに対して、ランズマンはそれ以上追及することはしない。ランズマンは「たんに責任を追及するというやり方ではなくて、実際にかかわった責任者自身に語らせるということに徹底的にこだわった」。鶴飼、高橋、岩崎「徹底討議／『ショア』の衝撃」前掲、83頁。ランズマンのねらいは当事者に語ってもらうこと、そして当事者の記憶をとおして虐殺のプロセスをたどり直すことであって、殺害についての個人的責任を問うことではない。

<sup>14</sup> Lanzmann, *op. cit.*, p. 85. 邦訳、ランズマン、前掲、135頁。

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 87. 邦訳、前掲、139頁

<sup>16</sup> *Ibid.*, pp. 88-89. 邦訳、前掲、139-140頁。

<sup>17</sup> ある箇所ではランズマンは、「ズーホメルさん、今、聞いているのは、あなたのことじゃありません。トレ布林カのことを知りたいんです」と述べて、ズーホメルが自分にかんすることを話さないように注意をうながしている。しかしこの言葉は、「[自分がいわれたのは]〈再定住〉作戦ですよ。「殺す」なんて一度も言われたことがなかった」というズーホメルの発言に対して向けられている。*Ibid.*, p. 84. 邦訳、前掲、133-134頁。ちなみにズーホメルの人物評価については、以下を参照。邦訳、ギッタ・セレンー『人間の暗闇』(1974)、小俣和一郎訳、岩波書店、2005年、180頁、209頁。

<sup>18</sup> 姜尚中、森達也『戦争の世紀を超えて』(2004)、集英社、2010年、51頁。

<sup>19</sup> Lanzmann, *op. cit.*, pp. 85-86. 邦訳、前掲、136頁。

<sup>20</sup> 姜、森、前掲、34頁。以下の箇所も参照。「森：個が共同体に帰属して一人称主語を喪失したとき、他者への想像力を失うことで恐怖が発動し、善意や正義をエネルギーにしながら殺戮が始まり、すべてが終わってからあ然とする」。前掲、72頁。ヒトラーはもちろん、個人が国家という共同体にしたがうことを強く求めていた。「国家を形成したりあるいは

また国家を維持するだけの力とは現実には何であるか、と問うならば、それは二、三の言葉に要約しうる。すなわち全体のために個人を犠牲にする能力と意思である、と」。邦訳アドルフ・ヒトラー『わが闘争(上)』(1925)、平野一郎、将積茂訳、角川文庫、2001年、204頁。

<sup>21</sup> 邦訳、プリーモ・レーヴィ『これが人間か』(1947)、竹山博英訳、朝日新聞出版、2017年、157頁。

<sup>22</sup> 前掲、269頁、注91。

<sup>23</sup> また別のいい方をすれば、収容所のなかでは「人間における人間性の裏面、哲学的に言えば、人間の条件における非人間性の構造と定義できるだろうもの」があらわになってくるのであり、それをこそランズマンは見せようとしている。Sami Naïr, « Shoah, Une leçon d'humanité » (1985), in *Au sujet de Shoah* (1990), Belin, 2011, p. 231.

<sup>24</sup> これとは逆に、アガンベンは以下のように記している。「SSの隊員たちがほとんど例外なく証言する能力がないということが明らかになったとしても、偶然ではない。犠牲者たちが、耐えることができたことはすべて耐えたがゆえに、自分たちが非人間的になったことについて証言したのに対して、死刑執行人たちは、拷問し殺しているあいだ、「立派な人間」でありつづけ、耐えることができたはずのことを耐えることをしなかったのだ」。邦訳、ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』(1998)、上村忠男、廣石正和訳、月曜社、2001年、103頁。しかし一方で「[SSの全国指導者である]ヒムラーのいうところでは、彼は彼ら〔絶滅収容所の職員〕に「超人的・非人間的」たることを期待した」という。邦訳、ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅(下)』(1961)、望田幸男ほか訳、柏書房、1997年、172頁。

<sup>25</sup> 邦訳、ハナ・アーレント『全体主義の起原(3)』(1951)、大久保和郎、大島かおり訳、みすず書房、1981年、258頁。

<sup>26</sup> Lanzmann, *op. cit.*, p. 82. 邦訳、ランズマン、前掲、130頁。

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 95. 邦訳、前掲、150頁。

<sup>28</sup> 邦訳、アーレント、前掲、261-262頁。

<sup>29</sup> 「自発性はまさに自発性であるがゆえに予測不可能なものであって、そのため人間に対する全体的支配の最大の障害になる」。前掲、261頁。

<sup>30</sup> アーレントのいうように「全体的支配のなかで脅かされているのは実は人間の本質なのである」。前掲、265頁。その意味で、全体的支配にかんする証言を集めつづけた「ランズマンは人間性の破滅を再現したのであり、そのさい、トレ布林カのあとで、アウシュヴィッツのあとでいかにして生きるのかという無限の問いを私たちに再び提示した」といえる。

Naïr, « Shoah, Une leçon d'humanité », *op. cit.*, p. 235. 他方で、フランソワーズ・ダスチュールの論から出発して考えるならば、ナチスの犯罪を考えるのにあたり人間の概念を使用することには問題もあるだろう。たとえば、人間という普遍的・包括的・形而上学的な言葉をつかうことで、私たちはいかなる集団のアイデンティティーをも支えている差異の概念までも捨て去ってしまっているのではないだろうか、ユダヤ人虐殺という犯罪に何か神秘的な偉大さを帰していることにならないだろうか、そして、単独的で個人的な犯罪を見ごしてしまうのではないだろうかといった問いが浮かんでくる。邦訳、ダン・ストーン「ホロコーストと「人間」」(2007)、『野蜜のハーモニー』上村忠男編訳、みすず書房、2019年、46-49頁。なお責任の問題については、邦訳、ハンナ・アーレント「集団責任」(1968)、ジェローム・コーン編『責任と判断』(2003)、中山元訳、ちくま学芸文庫、2016年、274-294頁を参照。

<sup>31</sup> 邦訳、アーレント、『全体主義の起源(3)』、前掲、258頁。また邦訳、セレニー、前掲、235頁を参照。

<sup>32</sup> 邦訳、レーヴィ、前掲、201頁。

<sup>33</sup> Lanzmann, *op. cit.*, p. 82. 邦訳、ランズマン、前掲、130頁。

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 83. 邦訳、前掲、132頁。

<sup>35</sup> 注16を参照。

<sup>36</sup> ザイドルとドゥギンがヘブライ語で話しているという情報は、『ショア』のテキストの邦訳に記されている。邦訳、ランズマン、前掲、41頁。

<sup>37</sup> Lanzmann, *op. cit.*, pp. 32-33. 邦訳、ランズマン、



前掲、47-48 頁。「気も狂わんばかりのリズムで」という部分は、邦訳では「気も狂わんばかりの速いテンポで」と訳されている。

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 96. 邦訳、前掲、151 頁。

<sup>39</sup> 簡潔に言えば「拍子は反復し、リズムは更新する」。Gisèle Brelet, *Le temps musical*, PUF, 1949, p. 297. このブルレのリズム論はドイツの思想家クラークスの考えから出発している。Ludwig Klages, *Vom Wesen des Rhythmus* (1934), Gropengiesser, 1944, p. 52. 邦訳、ルートヴィヒ・クラークス『リズムの本質』杉浦実訳、みすず書房、1994 年、57 頁。

<sup>40</sup> Brelet, *op. cit.*, p. 295.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 303.

<sup>42</sup> 邦訳、ジークムント・フロイト『モーセと一神教』(1939)、渡辺哲夫訳、ちくま学芸文庫、2003 年、211 頁。フロイトは別のところで、個人のレベルと人類のレベルを類比的に考えることを提案し、神経症症状のプロセスとユダヤ教発生のプロセスを関連づけて論じている。「ここで読者は、人類の生活においても個人の生活における事態と似たことが起こったという考えへと歩みを進めたくなるであろう。すなわち、人類の生活のなかでも性的・攻撃的な内容の出来事がまず起こり、それは永続的な結果を残すことになったのであるが、しかし、とりあえず防衛され、忘却され、後世になって、長い潜伏ののちに現実に活動するようになり、構成と傾向において神経症の症状と似たような現象を生み出すのにいたったのだ、と。／われわれはこのような出来事と成り行きを推測できると信じているし、その神経症症状に似た結果こそ宗教という現象にほかならないことを明示したいと思う。〔略〕現実に活動しながら同時に忘却されている心的外傷が人類史においても個人の神経症の場合と同じように人類そして人間の家族生活に結びついているのを経験的に知りうるのであれば、われわれはこの事実を大変に望ましい、予想されなかった、これまでの論述のなかでは求められなかった特別な贈りものとして歓迎して受け入れたい」。前掲、邦訳、フロイト、138 頁。

<sup>43</sup> 「突然そのとき、SSのズーホメルが姿をあらわし、自転車で柵にそった道を下りてきた。〔略〕柵

にそってウクライナ兵の持ち場を点検し、野菜畑に行く門の監視人のところをとって死の収容所のほうに姿を消した。この思いがけないズーホメルの出現に震え上がったが、だんだんと落ち着いた」。邦訳、サミュエル・ヴィレンベルク『トレ布林カ叛乱』(1986)、近藤康子訳、みすず書房、2015 年、170 頁。  
<sup>44</sup> ただし予測不可能なリズムは、もっと長い時間のなかでは、抑圧されたものの回帰としてネガティブな仕方で作用してしまうこともあるだろう。つまり、ユダヤ人が収容所から解放されたとしても、はじめの衝撃的な体験としての痛みや無力感や絶望はなくなったわけではなく、解放後も長いあいだ潜伏し、時間の隔たりをもって湧き上がってくる。たとえばレーヴィは、戦後何十年もかけて収容所での彼自身の体験を書きつづけて自分の傷と深く向き合ったが、そのあと自殺してしまう。そう考えると、時間的な隔たりというリズムはポジティブであるとともにネガティブであり、それこそが私たちの生と死をともに成り立たせているものかもしれない。ちなみにフロイトにおけるリズムの問題を生あるいは死へと関連づけた論考としては、たとえば、吉松覚「フロイトの読者、デリダにおける時間、生、リズム」『関西フランス語フランス文学』25 号、2019 年、55-66 頁を参照。吉松はとくにフロイト（そしてデリダ）の「躊躇のリズム」という言葉に注目している。前掲、58 頁、63 頁。

<sup>45</sup> Michel Foucault, « La “Gouvernementalité” » (1978), in *Dits et écrits 2, 1976-1988*, Gallimard, 2001, p. 652. 邦訳、ミシェル・フーコー「統治性」、石田英敬訳、小林康夫ほか編『フーコー・コレクション（6）』ちくま学芸文庫、2006 年、267 頁。

<sup>46</sup> 邦訳、ヒルバーグ、前掲、242 頁。

<sup>47</sup> Foucault, « La “Gouvernementalité” », *op. cit.*, p. 656. 邦訳、フーコー「統治性」、前掲、273 頁。